2017 年度点検・評価シート

※下記の指摘事項、課題を踏まえて、Ⅱ点検・評価　Ⅲ【達成目標】欄を記述してください。

（進捗状況を【現状説明】に記述し、必要に応じて新たに【目標】を設定する。）

2016 年度大学評価（認証評価）結果指摘事項 **＜概評＞** ・修学支援では、学部・学科単位で留年・休学・退学者への対処や補習・補充教育が行われているが、学生の能力に応じた補習・補充教育の整備を期待したい。 ・出席不良者・成績不良者の早期把握や個別面談、補習・補充教育のほかに、オフィスアワー、進級不可者への指導等の取組みが行われているが、その効果の検証が必要である。
2016 年度外部評価委員会指摘事項 なし
前年度からの課題（2016 年度点検・評価シート Ⅳ次年度への課題 より転記） 留年者、休・退学者数減少の達成目標及び目標達成の指標について検討を開始する。

Ⅰ　評価項目・担当部局

対象部局	文学部
評価基準 6	学生支援
点検・評価項目(2)	6-2 学生への修学支援は適切に行われているか。
評価の視点	留年者および休・退学者の状況把握と対処の適切性
	補習・補充教育に関する支援体制とその実施

Ⅱ　点検・評価　対象期間は 2016 年 4 月～2017 年 5 月までとする。（教員数、学生数などのデータの基準日は 2017 年 5 月 1 日）

【点検・評価項目ごとの現状説明】

6-2	**＜留年者および休・退学者の状況と対処法＞** 留年者と休・退学者については、状況を学科ごとに把握し、きめ細かな対応を行っている（B6-39 d2-表 36、37、38）。留年や休・退学につながる成績不振者には、基礎演習等のクラス単位で個別の学修指導を行っている。また、長期欠席者には、学科主任等による個別面談を実施している。学生支援センター経由で退学の意思が示された場合は、学科主任と相談し、条件によっては教員による面談を行い、意思確認を行ったうえで、「退学願」（申請書）を交付している。結果は教授会で報告し、常に学部教務委員会や学科内で対策を検討している。 **＜補習・補充教育に関する支援体制とその実施＞** 学部としての取り組みは実施していないが、オフィスアワーの実質を持つものとして、日本文学科では、研究室を学生に開放している教員が多く、教員との面談が自由なかたちで行われている。また書道学科では、自主ゼミ（毎週 1 回）や読書会（月 1 回）を積極的に開催し、「書学」「書作」のゼミを超えた自由な雰囲気で、補習・補充教育が行われている。
6-2	**以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【　】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。** （1）留年者および休・退学者の状況把握と対処の適切性【○】 具体的事例：五学科共通の「文学部学生面談シート」を作成して、成績不振者との面談に取組んでいる。 （2）補習・補充教育に関する支援体制とその実施について【×】 具体的事例：

【効果が上がっている事項】

6-2	

【改善すべき事項】

6-2	成績不振学生への個別指導体制を確立する。

Ⅲ　【達成目標】目標の進捗状況は、「S：完全に達成」　「A：概ね達成」　「B：やや不十分」　「C：不十分」　で、評価する。

達成目標		目標達成の指標となるもの		評価				
				2014	2015	2016	2017	2018
中期目標（2014～2018）	6-2「成績不振学生」の個別指導体制を確立し、留年者、休・退学者数を減少させる。	留年者、休・退学者数。	→			B	B	

16 年度 目標	6-2「成績不振学生」の個別指導体制を確立し、留年者、休・退学者数を減少させる。	留年者、休・退学者数が前年度よりも減少すること。			B	
17 年度 目標	（対象期間は 2017 年 4 月～2018 年 3 月）6-2「成績不振学生」の個別指導体制を確立し、留年者、休・退学者数を減少させる。	留年者、休・退学者数が前年度よりも減少すること。				B

Ⅳ　評価専門委員会所見

6-2 【現状】【効果】留年者および休・退学者の状況把握と対処は、学部としてシステム化されていて責任もって取り組んでいる様子が見られて、評価できます。実際、2015 年に比較して留年者の割合は減少しており、特に効果は明記されていませんでしたが、留年者に関してはあがっていると評価して良いと思います(表 d2-37)。退学率･休学率に関しては、学科による差異もあり、どの割合も誤差の範囲の変動とも思われ、割合から状況を判断する事はできませんでした(表 d2-36,38)。

6-2 【現状】2016 年度も今年も、日本文学科と書道学科の取り組みのみが示されていて、他学科の取り組みの現状がわかりません。取り組んでいる現状があれば記述していただきたいと思います。また、学科協議会などで。それぞれの学生の実態についての報告がなされ、教員間で現状の共有ができているのかどうかが重要だと思います。

Ⅴ　所見への対応

6-2 【現状】【効果】2014（平成 26）年度、2015（平成 27）年度、2016（平成 28）年度の三年間の、留年者および休・退学者の状況把握を再度行いました。その結果を根拠資料として添付します（A6-2）。過去 3 年の文学部合計留年者は 85 人→72 人→75 人（２年次 32 人→35 人→38 人と微増／４年次留年者 53 人→37 人→37 人と減少）と増減があります。過去 3 年の文学部合計休学者は 22 人→28 人→41 人（２年次 7 人→11 人→17 人／４年次 10 人→12 人→18 人）と増加しています。文学部合計退学・除籍者は 85 人→67 人→86 人（２年次 39 人→34 人→35 人／４年次 25 人→19 人→26 人）と増減があります。各学科についても根拠資料に明示されています。

6-2 【現状】各学科ともに、学科協議会において、それぞれの学生の実態について報告がなされています。

Ⅵ　次年度への課題

特になし

本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

A6-1　大東文化大学・大学院シラバス（CD-R）

大東文化大学ホームページ（Web シラバス）

http://www.daito.ac.jp/campuslife/syllabus/index.html　≪既出≫A4-2-16

B6-39 大学データ集　≪既出≫B1-22

A6-2 大学学籍異動の状況「休学」2014 年度、2015 年度、2016 年度

「退学及び除籍」2014 年度、2015 年度、2016 年度

大学学部留学生、編入学生、社会人学生、留年生の状況〔2014 年度、2015 年度、2016 年度〕

〔追加資料〕